

上平・平地区の概要

著者	田村 うらら
雑誌名	金沢大学文化人類学研究室調査実習報告書
巻	36
ページ	1-12
発行年	2021-03-31
URL	http://doi.org/10.24517/00064080



1. 上平・平地区の概要

田村 うらら

1. はじめに：実習全体の概要
2. 上平・平地区の概要
3. おわりに

1. はじめに：実習全体の概要

金沢大学人間社会学域文化人類学研究室は、2020 年度の学部 3 年生対象の実習科目「文化人類学実習」を、富山県南砺市上平地区・平地区を調査対象地として実施した。本報告書は、参加したメンバーが執筆した報告によって構成されており、本研究室の調査実習報告書としては 36 冊目となる。本実習の目的は、学生が社会調査のやり方を学ぶとともに地域の生活に対する理解を深めることであり、地域の問題解決や発展への提言におよぶ性格のものではない。この調査実習の参加者と調査日程の詳細については、巻末の「おわりに」に記した通りである。

本年の調査対象地としたのは、富山県南砺市の上平地区・平地区である（図 1 参照）。選定の理由はいろいろあるが、県外ではあるものの、大学から車で 1 時間強とアクセスが良いことが大きい。本年度はさまざまな制約があることが当初から予想されたため、日帰り調査や学生単独調査を想定して比較的近場であり、公共交通によるアクセスが一応可能であることも考慮した。また、この一般には「五箇山」として知られる一帯は、合掌造り家屋を目玉とした観光地でもあり、筆者が教育担当となっている地域創造学類の観光学・文化継承コースの 2 年生のインターンシップ科目の研修受け入れ先の一つとなっている。そのため、コンタクトがすでにあり、事前調査をしなくてもそれなりの知識と土地勘があったことも、現地に行けない可能性があった中では見逃しがたい利点であった。また、文化遺産・芸能・歴史の面で非常に特色があり、入手できる文献・資料・インターネット上の情報等の利用できる二次資料が豊富にあることも、選定理由として重視した。

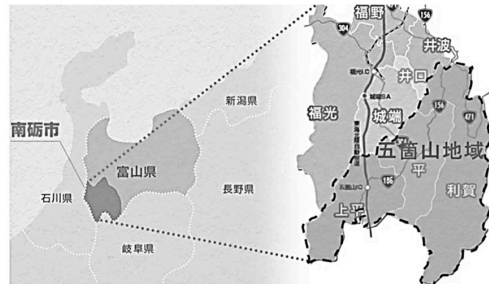


図 1 五箇山地域の位置（「南砺市地域再生計画」
〔内閣府地方創生推進事務局 2015〕より転載）

2020 年は、日本を含め世界中が新型コロナウイルスに翻弄された大変な年であった。年度始めの 4 月には日本全国で緊急事態宣言が発令され、金沢大学でも登学禁止・原則オンライン授業期間が長期化するなど、あらゆる面で大きな変化を余儀なくされた。当然のことながら、現地でのフィールドワークを主軸に据えてきたこの実習への影響は甚

大であり、常に先行きが不透明な中での運営は、試行錯誤そのものであった。したがって、現地調査はもとより、これまで毎年行なわれてきた様々な準備と執筆までのフォローアップ、資料収集の過程においても、例年とは異なる点が多々ある。このような状況下においても、なんとかフィールドワークを伴う調査実習を行なうという試行錯誤の痕跡を、例年よりもやや詳細に記録しておくことにも一定の意味があると思われるため、以下に述べたい。

まず4月から7月までは、Slack（スラック）というオンライン・プラットフォームや、学内のLMS（Learning Management System）を用いて資料共有や情報交換・課題指示等を行ないながら、毎週の授業をZoom（ズーム）というオンライン会議システムを用いて実施した。また、例年いわゆる「京大カード」とも呼ばれるB6版の紙の情報整理カードを用いてメンバー間でデータ整理・共有を行ってきたが、今年はその代わりに、メンバーがオンライン上でカード形式のページに自由に執筆・編集でき、一覧表示・キーワード検索などができるScrapbox（スクラップ・ボックス）というツールを活用した。例年この期間に実施している、調査方法の大まかな指導、文献・統計資料の分析は、すべてこれらのオンライン・ツールを駆使して実施した。しかし、各種資料の収集はオンラインで完結するものばかりではない。文献資料は、図書館へのアクセスが限られた期間が長かったこともあり、例年よりもオンライン上から入手できるものに偏りがあったことは否めない。また、例年6月に実施する役場での住民基本台帳閲覧は、この実習の伝統ともなっていたものの、今年度は実施することができなかった。統計資料については、オンライン上で入手できるものが増えている時代であり、幸い南砺市のウェブサイト上に公開されている統計資料が非常に充実しており、大いに役立てることができた。とりわけエクセル表としてダウンロードできる資料が豊富にあったことが、非常にありがたかった。ただし、例年図書館や役場を頼りに集めている、数十年前の産業関連のデータや、地区単位の詳細なデータなどが入手できず、詳細な分析はオンライン上では限界があった。そのような状況にありつつも、授業では統計の種類、統計の探し方・利用の仕方、エクセルでの統計データの整理の仕方などをZoomの画面共有で見せながら解説し、翌週の授業ではそれぞれの担当テーマで統計データや地誌・論文などの文献の内容を整理分析し、画面を共有しながら発表して議論も行ない、仕上げたデータファイルをメンバーで共有するなどの作業を繰り返した。そうして、前期期間の終わりには、例年の準備内容にそれなりに近づけることができたと考えている。

夏休みに入ってもなお、「本当に実施できるかどうかはわからない」としながらも、9月中旬の1週間を現地調査期間として設定し、宿の貸切手配、聞き取り会場の手配等々、感染対策に注意を払って現地調査の準備を進め、9月11日から学生10名、教員2名での調査を開始した。結果的には、予定を繰り上げて13日には突如切り上げるようになってしまったが、短い間ながらも滞在中に上平地区の団体等の代表の方々、様々な活動を展開される方を中心に、学生たちとともに直接現地でお話を伺う機会を得ることがで

きた。ただ、本調査の後半から平地区へと聞き取り対象を拡大しようとした矢先に切り上げる事となったため、本調査を実施できたのは上平地区のみであり、平地区については一部の学生が個別のテーマに沿って補充で行なった分に限られることもここで断っておきたい。

その後、秋の間は比較的国内での感染状況が落ち着きを見せ、大学の教育活動上の規制も緩和されたこともあり、学生それぞれが興味関心のあるテーマを決めたうえで、追加の資料を探したり、学生によっては個別に現地に赴いて聞き取り等の補充調査を実施するなどした。並行する授業のなかでは、報告書執筆に向けて意見交換や中間報告を行なった。しかし補充調査を行なった学生でもなお、現地滞在時間が例年よりかなり短いことに変わりはなく、データ不足をなんとか補う必要があった。

そこで、当該地域で他の人が収集して出版までの形に至っていないような情報も執筆のためのデータとして扱うことを検討し、学生たちに提供してもみた。具体的には2種類あり、ひとつは五箇山地域山村活性化協議会のメンバーが中心となり、地域の「古老」の方々に五箇山での昔の生活や民俗知識について、2018年から聞き取りをされた様子をこつこつと撮り貯められた貴重な映像資料である（詳細は巻末の参考資料一覧を参照）。我々の状況と使用目的にご理解いただき、ご提供いただいた協議会メンバーと関係者の皆さまに、この場を借りてお礼を申し上げたい。もうひとつは、前述の観光学・文化継承コースのインターンシップ科目で、前年2019年度のインターンシップ生（当時2年生）4名が、現地でさまざまな方々に伺ったお話を、本実習の方式にならってメモし、項目ごとに清書された100枚余りのB6版調査カードである。これら2種類の未出版データはいずれも、聞き取り者・相手・日時とその収集プロセス等が明らかな資料であり、これを一部の学生のテーマに大いに活かせたことは、本年の不幸中の幸いであった。

本実習の目的となっている準備段階では、学生たちは地誌・統計資料等を幅広く読み込み分析しながら、包括的・多面的に対象地区を捉えることを行なった。また、本調査は、例年どおり地区の各団体の代表の方々に、参加メンバー全員でお話を伺うところから始めた。これらは、本実習の目的のひとつに、ある地域を多面的・総合的に捉える視覚と方法を身につけることが据えられているためである。しかし本報告書の第2章以下は、例年同様、学生たちが個々の興味から選んだテーマによる章から構成されており、報告書全体として網羅的・包括的な内容となっているわけではない。そこで、次節において、対象地である上平・平の両地区について、地理的・歴史的な特徴や行政上の位置づけや特色など、特に学生たちが取り上げなかったテーマを中心に概観し、次章以下の各論への導入としたい。

2. 上平・平地区の概要

2.1 実習対象地区

本年度、文化人類学調査実習では、富山県南砺市上平地区・平地区を対象地区とした。富山県南西部にある南砺市は、石川県金沢市と県境を挟んで向かい合う位置にあり、金沢大学のある金沢市角間町からそのまま山越えしたところにその市街地が広がっている。市内総人口は50,040人、世帯数は17,698世帯である¹（令和2〔2020〕年4月1日時点）。広々とした散居村の田園風景が広がる市内平野部には、福光・福野・城端などの人口の多い地域があり、山間部には、平・上平・利賀などの人口の少ない地域がある。

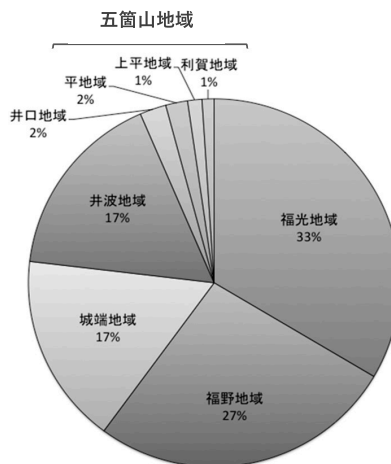


図2 南砺市内8地域の人口割合（平成27〔2015〕年度国勢調査データより筆者作成）

図2の南砺市内の8地域の人口構成を見ると、平野部と山間部で人口差が歴然としていることがわかる。この山間部の平・上平・利賀の三地域まとめて五箇山と称されており、これらはいわゆる「平成の大合併」と呼ばれる全国的な市町村合併の流れで2004年に南砺市に編入されるまでは、行政上それぞれ独立した村であった²。

次に上平・平地区の集落について、住民基本台帳をもとに南砺市が公開している数値をもとに（令和2〔2020〕年度末時点）概観する。表1にあるとおり、令和2（2020）年4月時点で、平地区には21集落、上平地区には16集落が存在する。平の下梨・上梨、上平の西赤尾町などの幹線道路（国道156号線）沿いで商店なども散在する集落では数十の世帯を抱える一方で、わずか1、2世帯しか残っていない集落も複数存在している。平地区の合計人口は923名、世帯数が338世帯であるのに対し、上平地区は630名196世帯と、平地区と比べると約2/3ほどの規模である。10年前の平成22（2010）年のデータは、平地区は1,156名397世帯、上平地区は780名215世帯であり、いずれも減少している。2010～2020年の10年間における人口減少率は、平地区20%、上平地区19%といずれも高い。各地域の高齢化率（65歳以上人口率）は、上平地区が44.7%、平地区が41.7%であり、いずれも南砺市全体の38.1%に比して高い。福光・福野などのもともと人口が多く市街地下の進んでいる市内平野部に比べ、山間部の上平・平地区では高齢化が進んでいることが理解できる。

¹ 住民基本台帳に基づき南砺市が公式ウェブサイト上で公表しているデータによる。

² このため、平・上平・利賀をまとめて五箇（山）三村とも言われた。

五箇山一帯は、庄川上流に位置し、1000m 級の山々に囲まれた山間部であり、面積の9割以上が山林である。五箇山の名前の由来は、赤尾谷・上梨谷・下梨谷・小谷・楯（利賀）谷の5つの谷間にある地域という意味で「五か谷間」であったのが、「谷間」を音読してヤマ、すなわち「五箇山」と呼ぶことになったとされる³。山も谷も深い地形が特徴的である。またこの一帯は、特別豪雪地帯に指定されるほど降雪が多く、平野部へのトンネルが開通するまで冬季は交通が遮断され「陸の孤島」となっていた（第7章参照）。五箇山では、このような気候風土にもとづいて発達した、合掌造り家屋が有名である。高度成長期に多くの茅葺き屋根の合掌造り家屋は、建て替えやトタンへの葺き替えなどによって消失した。他方、集落単位で合掌造りが維持されてきた五箇山の2集落（相倉・菅沼）は、隣接する白川村の白川郷の1集落とともに、1995年にユネスコの世界遺産に登録されている。それ以外の集落においても、多数の使用人を抱えていたようないわゆる「地元の名家」の所有する家屋などは国の文化財指定を受け、今日まで茅葺合掌造りの美しい姿を残している。また五箇山は、「こきりこ節」「麦屋節」などの民謡の里としても知られ、民謡継承の活動が非常に盛んである（第5章参照）。この代表的な2つの民謡それぞれの保存会があり、それぞれの大会も毎年秋に開かれており、地元のみならず各地から大勢の観客も訪れる。むろんこのような明らかな「観光化」は現代的な変化である。しかし五箇山地域は、雪深く谷の深い庄川に沿った山間集落でありつ

表1 平・上平両地区の集落別人口と世帯数
(令和2〔2020〕年4月1日)
住民基本台帳に基づく南砺市公開のデータより筆者作成

行政区		人 口			世 帯 数
		男	女	総 数	
南砺市計	集落名	23,997	26,043	50,040	17,698
平地域計		436	487	923	338
平	下梨	79	89	168	65
	大島	45	49	94	34
	竈渡	29	23	52	16
	下出	29	36	65	21
	東中江	27	16	43	19
	高草嶺	9	17	26	14
	夏焼	2	3	5	2
	平入谷	11	13	24	13
	寿川	13	10	23	8
	大崩島	16	13	29	9
	祖山	14	18	32	13
	杉尾	12	8	20	8
	渡原	1	1	2	1
	上松尾		2	2	1
	小来栖	12	20	32	12
	来栖	19	23	42	13
	中畑	14	17	31	13
	見座	20	25	45	14
	相倉	21	33	54	19
	上梨	47	48	95	30
	田向	16	23	39	13
上平地域計		296	334	630	196
上平	成出	4	5	9	3
	楮	38	35	73	18
	真木	2	3	5	4
	東赤尾	4	5	9	3
	新屋	32	37	69	23
	田下	7	8	15	4
	菅沼	15	19	34	6
	上平細島	25	34	59	19
	小原	18	18	36	15
	猪谷	26	29	55	19
	皆葎・葎島	59	63	122	36
	小瀬	2	2	4	2
	漆谷	5	5	10	4
	下島	13	17	30	9
	西赤尾町	46	54	100	31

³ 「越中五箇三村の民俗：越中五箇山民俗資料緊急調査報告書」（富山県教育委員会 1971：4[586]）より。

つも、古くから越中より飛騨へと抜ける交通の要所でもあったため、「人里離れた山あいの村」という合掌造りから喚起されるイメージからは見落とされがちな、各地との文化・経済の交流の長い歴史を有している。

2.2 行政単位の変化

五箇山地域は、鎌倉時代末から室町時代初期には現在の集落とほぼ同様に人が住みついていたとされ、1585 年に前田家の支配下に入ったのち、江戸時代を通じて加賀藩に属していた⁴。「(現在富山県ながら)ここは昔加賀藩でした」というのが、五箇山の地元の方々が歴史語りをされる際に、必ず口にされるフレーズである(第6章参照)。藩政時代には、金沢からの距離的な近さ、山間部という外部から秘匿しやすい地理条件などが合わさってのことであろう、加賀藩に納める火薬の素「塩硝」の秘密の産地であり、また藩の政治犯の流刑地ともなっていた⁵。江戸末期には、全国的に見ても質・量ともに随一の塩硝産地であったという。

その後、明治に入って近代的な地方自治体編成が順次進んだ。この地域に関わる大きな出来事としては、明治 11 (1878) 年には、「郡区町村編制法」制定に基づき、行政区画として砺波平野を中心とする礪波郡(となみぐん)が発足し、この地域は同郡に編入された。明治 22 (1889) 年に、五箇山地方においては、上梨谷・下梨谷・小谷の村々から平村、上梨谷・赤尾谷の村々から上平村、小谷・利賀谷の村々から利賀村と改称され、ここに「五箇山三村」が成立した。さらに、明治 29 (1896) 年郡制施行のため礪波郡が廃止されて東礪波郡と西礪波郡の2郡に分割された。その際五箇山一帯は東礪波郡に編入された。このように明治期に目まぐるしく行政区画変遷があったものの、その後 100 年以上もの間、五箇山は東礪波郡の管轄下にあり、3つの村はそれぞれ独立した村として村長・村役場などを有していた⁶。

平成 16 (2004) 年、それまで東礪波郡下にあった城端町・平村・上平村・利賀村・井波町・井口村・福野町が、西礪波郡福光町と合併し、南砺市が発足した。つまり五箇山地域は、南砺市の行政下に入ったのである。それまでの町村役場のかわりに南砺市の行政センターが、各地区に置かれるようになった。調査対象地区にも、現在、南砺市の上平行政センターと平行政センターがあり、南砺市の市民行政の窓口を担っている。

2.3 産業

周りを山に囲まれ、庄川に深くえぐられた谷の両側に集落が散在する五箇山一帯は、山林の占める面積が9割を超えており、耕作地が極めて限られている。水田耕作は特に困難であり、成出ダム(昭和 26 [1951] 年完成)など、関西電力による庄川流域のいくつものダム建設を契機として、ようやく田に水が引けるようになった集落が多い⁷。

⁴ 「越中五箇三村の民俗：越中五箇山民俗資料緊急調査報告書」(富山県教育委員会 1971:4[586])より。

⁵ 同上(2971:3-4[585-586])より。

⁶ 『越中五箇山 平村史・上巻』(平村史編纂委員会 1985:666)より。

⁷ たとえば 2019 年 9 月楮集落の K さん(男性、90 歳代)への聞き取りによる。

そのため、五箇山の人びとは長らく、アワ・キビ・ヒエ・ソバなどの雑穀や野菜を育て、厳しく長い冬のために保存食を大いに発達させながら暮らして来た。藩政時代の租税としては、農産物ではなく、塩硝や和紙⁸を加賀藩へ納めていたという。また、合掌造り家屋の構造をうまく利用した養蚕も、塩硝生産が途絶えた明治期から昭和初期までは盛んであった（第2章参照）。昭和の初期までは、どの家でも夏は養蚕・冬は紙すきというのが、平均的な五箇山の生業であったと地元の年配者たちは語る。

以上の通り五箇山地域では、その地理的条件から農業が生業として重要な位置を占めてこなかったが、加賀藩との深いつながりや、飛騨と越中との交通路上に位置していたことなどから、特徴的な上納品・交易品を産出してきた点が、産業の特徴と言える。

では、現在そこに暮らす人びとにとっての生業は、どうなっているのだろうか。地元での職業選択肢を問えば、民宿等の個人宿泊業・土産物・食料等の小売商店、防災等さまざまな地元周辺の工事を請け負う土木業、農業公社あるいは森林組合勤務、関西電力のダム関連職員などが挙げられた（Mさん、男性、70歳代、細島）。実際に現地を訪れると水田や畑も見られるのであるが、農業はこの選択肢には挙げられなかった。農業は、山に囲まれ耕作地自体が少ないこの地域では、あまり生計の手段としては考えられていないようである。その現状を統計から読み解いてみたい。以下2015年農林業センサス（農林水産省経済局統計情報部 2015）によれば、平地区の総農家数は152戸であり、総戸数のおよそ半数が農家に数えられているが、そのうち専業農家はわずか3戸、第1種兼業農家（世帯収入のうち農業が主）は1戸である。上平地区では、総農家数119戸、専業2戸、第1種兼業1戸である。また販売農家就業人口および戸数は、平地区で計34人29戸、上平地区で計31人31戸である。販売農家のいずれも大半が60歳以上であり、さらに75歳以上が半数以上を占める状況である。また、戸別経営面積も上平・平ともに0.3-0.5haが7割前後を占めている。以上の統計からも、この地区において農業は自給的な性格が強く、家計を支える主たる生業としてはほとんど成立していないことがわかる。

上平・平地区は、若年人口流出に悩む過疎高齢化地域であり、ここでも、「地元の仕事がないから仕方がない」という住民の諦めの声がよく聞かれる。また、南砺市の管轄下となったことで、地元の勤め口として貴重であった「役場職員」という選択肢がなくなったと嘆く人もいる。ただし現在は、トンネルや高速道路が整備されて冬季の交通寸断が解消されたため、砺波市などの平野部や金沢市まで毎日通勤するサラリーマンもいる⁹。また、教員や消防士として近年Uターンした住民も若干名はいるようである。

⁸ 和紙は現在でも「五箇山和紙」の名で特産品として生産が続けられ、土産物として様々に加工されて販売されている。「紙漉き体験」などの体験観光メニューとしても人気がある。

⁹ Mさん（男性、70歳代、細島）、Aさん（男性、40歳代、菅沼）。

2.4 地区組織

今年度の限定的な調査では、例年かなり詳細に調べている各種の地区組織について、体系的に調べ上げることはできなかったものの、特に上平地区については、「上平地域づくり協議会」会長 M さん（男性、70 歳代、細島）や同協議会事務局長の T さん（男性、60 歳代、新屋）から聞き取りを実施できた。そのため、ここでは上平地区の地区組織について情報を整理して示す。なお、ここで述べる上平地区で既存地域組織をもとに発足した「地域づくり協議会」は、平地区でもすでに同様な経緯を経て発足しており、地区組織自体の構造については、上平・平とも現在ほぼ同様と考えられる。

以下、上述の M さんへの聞き取りと同協議会発行のニュースレター記事¹⁰をもとに記述する。上平地区では、「上平地域づくり協議会」が令和 2（2020）年 4 月に発足した。これは、既存の自治組織のうちの 3 つ、すなわち上平自治振興会、上平公民館、上平地区社協を統合して新組織としたものである。この統合の背景には、南砺市の財政上の都合があり、より各地域の自主的な運営を促す目的もあった。協議会には、3 つの部会すなわち「地域づくり部会」、「健康・福祉部会」、「生涯学習・子育て部会」が置かれ

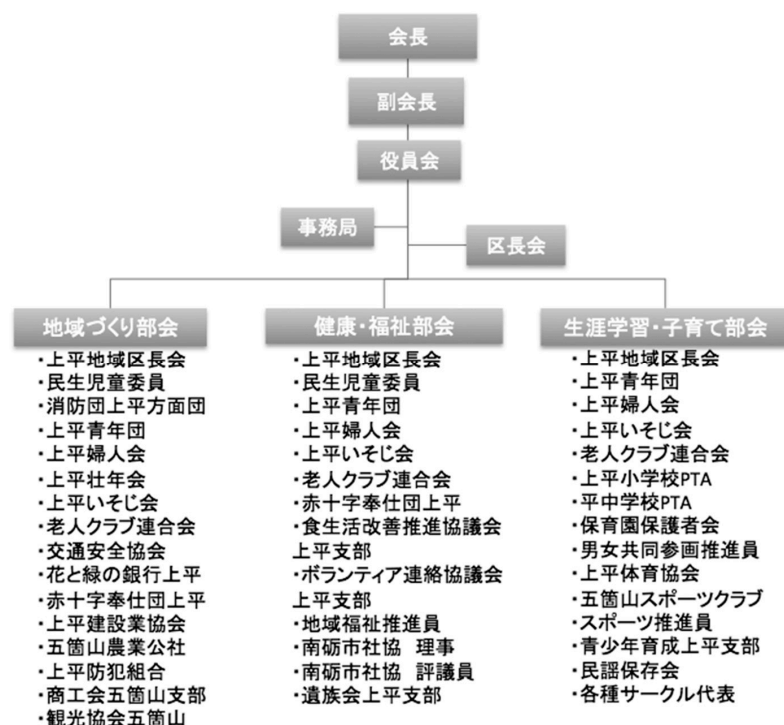


図 3 上平地域づくり協議会 組織図

上平地域づくり協議会だより No.1（令和 2〔2020〕年 6 月 25 日発行）をもとに筆者作成

¹⁰ 上平地域づくり協議会ウェブサイトより。

ている。各部会の下には、様々な団体が名を連ねている。それぞれに特徴的な団体として、「地域づくり部会」には商工会や観光協会が、「健康・福祉部会」には、地域福祉推進員や南砺市社協の役職員が、「生涯学習・子育て支援部会」には、小中学校 PTA や保育園保護者会、民謡保存会、体育協会等がある。なお3つの各部会長が、協議会全体の副会長も兼任している。

また、区長会や、いずれも年齢層別自治組織である青年団・婦人会・いそじ（五十路）会・老人クラブ連合会は、どの部会にも横断的に所属している。上平における年齢層別の組織は、青年団（学校卒業～35歳）、壮年会（35歳～40歳代）、いそじ会（50歳代＋一部60歳代）、老人クラブ連合会（60歳～）がある。老人クラブ連合会は男女混合であるが、女性は老人クラブ加入前には婦人会に所属する。また、老人クラブは一応60歳から加入可となっているが、近年は実際には70歳近くになって加入する人が多いという。やはり地域人口として高齢者が多いこともあり、会員が70～80名程度いるという老人クラブ連合会の活動が最も活発で、「派手」であるという。寺の住職を招いての法話や、地域防災に関わる講演などの「会員向け教養講座」を毎年開催している。そのほか、冬には神社の鳥居のためのしめ縄づくり、わらじや雪用の長靴「深靴（ふかぐつ）」などの藁細工の技術を習得して作品を作って販売する活動なども行なっている。他方、人口規模も少なく働き盛り世代からなる壮年会の活動は、近年低迷しているとのことであった。

以上がMさんからの聞き取りによる地区組織の概況である。その中に「壮年会」の活動が低迷していると言及があった。しかしその壮年世代の中でも、地元で「観光化」や「里山環境保全」等の、世代別ではなく目的別の団体において、世代を超えて地域活性化などの活動に積極的に関与したり主導的立場となっている方々がいることは、特筆に値するだろう。たとえば、第3章では、山の手入れをしながら合掌造り屋根の茅の地域自給を目指す団体が紹介されているが、この代表者も40歳代であり、他にもさまざまな団体・プロジェクトを手がけるなど、地域活性化のキーパーソンの一人である。この働き盛りの壮年世代にとっては、世代ごとに集まることよりも、問題意識を共にする世代を超えた人々と運営・実働部隊として何かを推進することに意味を見出しているのかもしれない。

2.5 寺社と信仰

室町時代のうちに飛騨との交流の中で浄土真宗が五箇山地域にもたらされた¹¹。一帯は熱心な真宗信仰地域であり、西赤尾にある行徳寺をはじめとして、瑞願寺、西勝寺、円浄寺、称名寺などの真宗寺院が存在する他に、住職のいない真宗の念仏道場も存在する。報恩講などの行事も盛んであるが、仏教信仰の実践については、第4章に詳しいためここでは割愛する。

¹¹ 「越中五箇三村の民俗：越中五箇山民俗資料緊急調査報告書」（富山県教育委員会 1971）より。

各集落には、少なくとも一つの氏神を祀る神社があり、それぞれに春祭りと秋祭りがある。祭礼においては、若い衆による獅子舞が重視されており、またこの地域の特色ともなっている。しかし集落によっては高齢化により獅子舞の継承が危ぶまれている。いずれの祭礼も、集落の宮ごとに定められた日程で実施されている。祭礼の時期は、春季の祭礼は4月下旬から5月上旬に2日間ないし3日間かけて行われるのに対し、秋季は9月下旬から10月上旬に1日間となっている¹²（上平村役場 1982）。旧来この一帯でほとんど稲作ができなかったこともあり、一般的に実りへの感謝の意味をもつ秋祭りよりも、春祭りのほうが重視されてきたという。開催日数の違いにもそれがあらわれている。雪深い山里で春の訪れを祝う春祭りは、今も昔も住民にとって特別な思い出のあるものなのであろう。なお、神社のしめ縄飾りは、新年ではなく春祭りの直前に新調するのが五箇山一帯の慣例である。

以上、浄土真宗と氏神信仰としての神社との関わりについて簡潔に述べた。ほとんどの集落にも真宗寺院ないし念仏道場と、氏神を祀る神社があり、住民たちはそのどちらも信仰の拠り所としてきた。例えば小原集落のように、神社境内に寺院が建っている例も複数あり、神仏習合の信仰のあり方をあらわしていると言えるだろう。

2.6 教育

では、上平・平地区の教育環境はどのようになっているのであろうか。本小節では、地域内の保育園、小・中・高等学校と進路について述べる。

保育園は、上平・平の各地域に1ヶ所ずつあり、いずれも南砺市立の保育園である。上平保育園は、東赤尾集落にあって定員は30名、平みどり保育園は、下梨集落にあって定員は40名である¹³。

平成26（2014）年3月平小学校は閉校、4月上平小学校（皆葎）に統合された¹⁴。南砺市立上平小学校の児童数は、令和元（2019）年度で75名、1学年あたり9～16名で構成されている¹⁵。特別支援学級を含めて全7学級であり、複式学級は採用されていないことがわかる。既出のMさんによれば、校区が上平地区・平地区と広範囲に及ぶことから、市の予算によるスクールバスがあり、徒歩圏外の児童はそれを利用して通学している。この通学事情は、中学校も同様である。

南砺市立上平中学校は、平成21（2009）年3月閉校し、南砺市立平中学校に統合された。統合当初は皆葎の旧上平中学校校舎を利用していたが、2年後の平成23（2011）年、下梨の新築校舎に移転した¹⁶。南砺市立平中学校の生徒数は、令和元（2019）年度で40名、1学年あたり12～14名で構成されている¹⁷。

¹² 『上平村誌』（上平村役場 1982）の集落史部分（pp. 328-476）の集落誌部分より、情報を統合した。

¹³ 「南砺市移住ガイド なななんと」ウェブサイトによる。

¹⁴ 南砺市立上平小学校のウェブサイトによる。

¹⁵ ガッコム（全国の学校情報ウェブサイト）の情報による。

¹⁶ 南砺市立平中学校のウェブサイトによる。

¹⁷ ガッコム（全国の学校情報ウェブサイト）の情報による。

続いて高等学校について説明する。富山県立南砺平高等学校が平地区の大島にある。生徒寮も併設されていて砺波など平野部からの生徒も在籍している。入試募集人数は30名であり、同校のウェブサイト上の進路状況資料（平成29〔2017〕～令和元〔2019〕年度）からは、例年1学年29名で構成されていることがうかがえる¹⁸。地元住民は「平高校」「福野平高校」などと呼ぶ。これはもともと昭和25（1950）年に福野高等学校平分校として開設され、平成7（1995）年に「平高等学校」に、続いて平成17（2005）年に「南砺平高等学校」に校名が変更された¹⁹経緯があるためであろう。

五箇山地域の高校生が皆、南砺平高等学校に通学する訳ではもちろんない。福野など南砺市内の平野部、あるいは砺波までもバスで通学する生徒もいる。地元の高校生の卒業後の進路は、大学・短大・専門学校等への進学か就職である。なお、南砺平高等学校の進路は、進学と就職がおおよそ5:1であることが、前述の進路状況資料から読み取れる。たとえば令和元（2019）年度卒業生29名中、24名が進学し、その内訳は大学が12名、短大・専門学校がそれぞれ6名である²⁰。

就業機会に加えて、教育環境の充実、若年層を地域に引き留めるためには重要な要素となる。日本の過疎高齢化地域は特に若年層の流出が著しく、小中学校の統廃合が相次いでいるが、上述の通り上平・平地区においても例外ではない。とはいえ、統合しながら複式学級を回避しつつ、なおかつアットホームな少人数教育の良さを発揮していると地元住民は語り²¹、都会からの移住者もその点に魅力を感じているという。もちろん、子どもにとって豊かな自然に囲まれた環境も大きな魅力であろう。夏はハイキング、「桂湖キャンプ場」などでのキャンプ、カヌーなど、周辺はアウトドアの遊びには事欠かない。冬は雪遊びが満喫できる。上平には「タカンボースキー場」、平には「たいらスキー場」があり、学校等でソリ遊びやスキーに正課活動のなかで活用されている。さらには、保育園から高校まで、地元住民の民謡団体の協力を得ながら五箇山の民謡などの伝統芸能に触れる機会も多い（第5章参照）。このように、豊かな自然を生かした屋外活動や特色ある郷土学習が行なわれていることも、本地域の教育の特色である。

3. おわりに

以上、本年の実習調査の対象となった上平・平地区について概観した。上述の通り、第2章以下の学生による各章は、各々の関心に基づいてテーマ設定がなされている。そのため地域総合調査の報告書としては抜け落ちているテーマも多い。本章でそこを最低限補ったつもりである。

以下の章は、調査期間がいつもにも増して少ない中で、学生たちがそれぞれに工夫し、試行錯誤しながら自ら補足調査し記述したものである。なお、本年度報告書における、

¹⁸ 富山県立南砺平高等学校のウェブサイトの情報による。

¹⁹ 富山県立南砺平高等学校のウェブサイトの情報による。

²⁰ 富山県立南砺平高等学校のウェブサイトの情報による。

²¹ 例えば上述 M さん（男性、70 歳代、細島）、S さん（男性、60 歳代、皆葎）の語りより。

お話を伺った方々の年齢について「○歳代」との記述は、その筆者の主観的な推定に基づいている。「○歳」と確定的に記述してあるものについては、ご本人等に確認を経た聞き取り時点での年齢であることを付記しておく。そのほかにも私ども教員の力不足と学生の未熟さゆえ、本報告書の記述に不正確・不十分な部分があるものと予想している。また、貴重な時間を割いて聞き取りなどの調査にご協力いただいて得ることのできた、貴重な情報のなかには、この報告書に記載しきれていない部分も多いだろう。ここにお詫びするとともに、今後のために、ぜひ関係各位の忌憚ないご意見・ご叱正をお願い申し上げます。